

陽のあたる部屋の隅、横山明夫は腰をほぼ直角に折り曲げたまま唇を噛みしめていた。十月も終わりに近づき、日差しはそう強くはないはずなのに、握りしめた手のひらはしっとり汗ばんでいる。周囲で仕事をしている人の、無関心なようすでいてこちらの様子を窺う気配が気まずくて仕方なかった。

「今回のこと、誠に申し訳ありません。加賀はこちらの部署に配属になって何分日が浅く、流通のシステムといったものをしっかりと把握できていませんでした」

謝罪の言葉に、横山の向かいに立つ、企画部の部長である沖田はフンツと鼻を鳴らした。四十代後半、歳相応に突き出た腹、季節に關係なく年中顔を脂ぎらせている沖田が、女子社員の間で「オイルタンク」と呼ばれているのは、他部署の横山の耳にも聞こえてきていた。

「加賀くんが慣れてないのはこっちだつてわかってるよ。けど彼の言っていることは流通システムとは直接関係ないように思えるんだけどねえ」

的を射ているだけに辛い。だけどそれを認めてしまえば「企画部から出される商品の……」
長い沈黙の後、ようやく後輩が重たい口を開く。横山がホツと胸を撫で下ろしたのも束の間だった。

「発想が古いと言ったこと、俺は間違っていると思わない。先月商品化された『ハッピー・ルール』だつて、今時あんな玩具を喜んで買うのは田舎の年寄りくらいだ。あれを目利きがそろっている卸問屋に売り込む営業のこと、企画は考えてくれたことがあるんですか？」

横山の全身からドツと汗が噴き出す。慌てて沖田の表情を窺うと、信号機のように真つ赤になり、大きく振り上げた拳を机に叩きつけた。大きな音が部屋中に響き、様子を窺っていた周囲もビクリと体を震わせる。

「つべこべ文句を言うなつ。出されたモンを売り込むのが営業の仕事だろう。自分の能力のなさを『商品』のせいにするんじゃないつ」

加賀の背中が、威嚇する猫みたいにいきり立つ。
「加賀くん、落ち着いて」

囁くような横山の声も、多分聞こえてない。

身も蓋もなくなる。あくまで仕事に不慣れな上での失態だと押しきつてしまう方が賢いのは、火を見るよりも明らかだった。

「本当に申し訳ありませんでした。加賀くん、君からも謝つて……」

ひたすら俯いていた頭を上げ、横山は隣に立つ今回の騒ぎの張本人、加賀良太に声をかけた。電柱のように突っ立っている後輩は、明後日の方向を向いたまま何も言わない。

「……加賀くんつ……」

小声で促しても、後輩は不貞腐れた顔のままむつつりと口を閉じている。沖田は暑苦しい見た目、粘着質な物言いと異なり中身はあっさりとした男だから、素直に謝れば許してくれるはずだった。

「企画部長に一言謝ればそれですむからね」

ここに来る前、散々そう言い聞かせておいたのに「すみません」の一言もない。頑固な加賀の態度と、どんだん陰を増してくる沖田の表情に、横山はこの場をどう取り繕えばいいのかわからなくなってきた。

「ベテランの横山ならともかく、平同然のお前に文句を言われても、説得力つてものがないんだよ。企画に文句があるなら、文句を言えるだけの実績を積んでから出直してこいっ」

沖田が犬でも追い払うように振った指先。それが起爆剤のように加賀は前に飛び出した……が、間一髪で横山は命知らずの後輩の袖を掴むことに成功し、強引に自分の背中に隠した。

「本当に申し訳ありませんでした。本人には僕からよく言い聞かせておきますので、今日はこれで失礼します」

興奮して肩先を震わせている男を連れ、逃げるように企画部を出る。背後で扉の閉まる音を聞くと同時に、両肩にドツと疲れがのしかかった。穩便にコトをすませるつもりが、火に油を注ぐ結果になった。どこでどう計算が狂ったのか……理由は明白。後輩が「謝らなかつた」からだ。

二階へと続く階段の手前で、不意に右手を払われた。企画部を出てから、手首を掴んだまま歩いてきた。どうもそれが後輩には不愉快だったらしい。

「どうして横山さんはあんなヤツに頭を下げる事ができるんですか！」

食ってかかる男に「お前が下げないからだよ」とは言えず苦笑いする。

「ヒット商品は少ないけど、企画は企画でプロ意識を持つて頑張ってる。売れないからって一方的に向こうを責めるのはよくないよ」

加賀はきついまじりで横山を睨みつける。二ヶ月前、

加賀が地方から本社に栄転してきた時は、高い身長に端正な顔立ちが女子社員の間で随分と騒がれていたが、それもほんの一瞬だった。容姿を上回るキツイ性格と容赦のないもの言いに、誰もついていけなかったからだ。横山もどこをどうやったら後先考えず、こんなに虚飾を取り除いたシンプルな言葉が吐けるのか、一度聞いてみたいくらいだ。

「俺はあの部長に謝りません」

強い語調で言いきり、先に歩き出した加賀の背中を見ながら、横山は額を押さえたため息をついた。それを聞きつけたかのように加賀が振り返り、その勢いに驚いて足を止め

られないが、疲れがやたらと身に沁みるのは、年のせいかもしれない。

横山が勤めているのは、乳幼児から幼児対象の玩具を扱う、業界でも中堅クラスの「アップ・ムーン」というおもちゃ会社だ。子供の頃から合体ロボやミニカーに目がなく、将来は絶対におもちゃ会社の社長になって一日中遊んでやるんだと心に決めていた。大人になると、流石に社長になって遊ぼうとは思わなかったが、就職活動の際は迷わずにおもちゃ会社を選んでた。

入社当初は、自分の作ったおもちゃを市場に出すという野望もあったが、悲しいことに横山には「才能」と「センス」という必要不可欠な部分が二つそろって仲良く欠けていた。悪あがきのように社内コンペに新製品の企画書を出したこともあったが、自分の限界を知ってからは心機一転、営業一筋にやってきた。たとえ自分で何かを生み出すことができなくても、少しでもおもちゃに関わった仕事をしていくことで満足していた。好きでしている仕事。今まで不満を感じたことはない。けれど今回の件だけは本当に勘弁

ると視線がぶつかった。息をすることも躊躇ってしまいうな緊張感。それを誤魔化すように曖昧に笑うと、加賀は眉間に皺を寄せて、不機嫌の度合いをさらにつり上げた。「そんなへらへら笑ってばかりいて、顔が疲れませんか」呆れたような口調でそう言われ、横山は半開きの口を閉じることができなくなっていた。

足許をふらつかせながら横山は玄関ドアの鍵穴にキーを差し込んだ。冷たく暗い玄関の灯をつけ、廊下、居間と順に明るくしていく。寝室のベッドに靴を放り投げ、腕時計を覗き込むと午前零時に三分前だった。

今月に入ってから「今日」のうちに部屋に帰り着くことができたのは三日だけ。ここで倒れて突然死なんてことになつたら、労働災害の適応になるんだろうかと馬鹿みたいなことを真剣に考えてみる。十二月に入つたら、クリスマスに正月と一年のメインイベントが立て続けにやってくるから更に忙しくなる。この程度で音を上げてはやつて

してほしかった。

緩めたネクタイが足許に落ちて、拾おうと屈み込むと同時に胃がキリツと痛んだ。最近よく痛む。これが噂に聞くストレス性の胃炎だろうか。悪化して病院の世話なんてことになつたら最悪だ。せつかく家に帰ってきたんだから、仕事のこととは忘れよう。前向きに考え、背広を脱いでハンガーにかけた。そういえば今日、加賀も同じ色のスーツを着ていた。加賀良太、あの後輩と明日も一緒に仕事をしながらはいけないんだと思うだけで、また胃が刺すように痛んだ。

営業という仕事柄、人間関係での苦労はこれまでも多々ある。けれど一人の人間の言動にこれほどまで振り回されたのは、三十年の人生において初めてだった。人のことは悪く言わないようにしている。偽善ではなく、悪口は後になって自分に返ってくると思うからだ。だけど、加賀は……周りを見ないというか、頑固で融通が利かなすぎる。

営業は人との付き合いが必要不可欠。取引を円滑に進めようとすれば、多少の愛想やお世辞は物事を切り出す前の

前置詞と割りきらないといけない。加賀にはそこところがわかっていない、馬鹿正直に「駄目なものは駄目」「嫌なもの嫌」と言う。考えようによっては裏表のない性格だと言えないこともないが……。

「企画の商品が今ひとつだつていうのは黙つててほしかったな」

シャツを脱ぎながら脱衣所に向かい、汚れ物をランドリーに投げ込む。そうしてふと顔を上げると、洗面所の鏡に首の付け根から腰にかけてまるでミイラ男のようにサラシを巻きつけた自分の上半身が映った。日常の光景ながらうんざりする。慣れた手つきでサラシを上から順に解き、すべてを取り去った後で横山は両手を大きく広げて背伸びをした。バサバサと背中中で乾いた音がる。サラシの拘束から解放されて、背中のアレもリラククスしているらしい。調子に乗つてバサバサ上下させていると、危うく飛びそうになつた。

横山は鏡に背中を向け、軽く首を振つた。どこにでも叩き売りされていそうな三十男の背中に羽がついている。普

話をする時母親はいつも悪戯いたづらつ子のような顔になつた。

「お母さんに一目惚れして、人間になりたくて天使をやめたんですって」

「じゃあお父さんの背中には羽があつたの？」

「邪魔だから天国に置いてきたらしいわよ。けど羽を取つた痕あとがちやあとと背中に残つてたわ」

「天使の子供なら、僕も天使なの？」

「あら、明夫は駄目よ。だつて天使と人間のハーフなもの」
多分、母親だつて父親の言葉をまともに信じていなかつた。優しくて、気弱で、ちよつと頭の弱い男の独り言だと思つていた。……一晩で子供の背中に天使の羽が生えてきてしまふまでは。

運命の朝、横山は昨日まで何ともなかつた背中が瘤こぶみたに出つ張つて痒いのが気になり、母親の前でパジャマピジャマの背中を大きくまくり上げた。

「お母さん、背中が痒くて変だよ」

羽に触れ、引つ張り、それがどうやら本物らしいと確信した母親は、次の瞬間に笑い出してた。

通の人間には到底ありえないもの。肩甲骨の下からすらりと伸び出した雪のようなそれは、まっすぐに広げると横に伸ばした手と同じ長さになる。あまつさえ空を飛ぶこともできるような大層な代物。見慣れた、そして見飽きた背中の羽から視線を逸らし、バスルームの明かりをつけた。

横山が「羽持ち」の生活を送るに至る経緯は、二十年以上も昔に遡さかのぼる。最初、背中に羽は生えてなかつた。小学校二年生のある日、突然背中から飛び出してきたのだ。原因はどうやら父親にあるようだが、その父親も横山が幼稚園に上がる前に病気で亡くなつてた。母親は明るい人で、二人だけの生活でも寂しいと思つたことはなかつた。母親の弟の信宏のぶひろ叔父も近所に住んでいたし、母子家庭の子供を不憫おぼやに思つてか父親がわりによく遊んでくれた。母親は寝物語の絵本のかわりによく父親の話をしてくれた。その中でも横山の一番のお気に入り、父親が天使という話だつた。

「お前のお父さんはね、自分のことを天使だつて言つてたのよ」

「嫌だわ、あのうつたら」

どこまでも陽気な人だつた。けれど実際問題、羽が背中にある生活は不便だつた。母親は最初、医者である弟の信宏叔父に相談した。けれど信宏叔父は医者は医者でも専門が口腔外科、いわゆる「歯医者」で、姉の子供の突然変異ぽうぜんに呆然と頭を抱えた。ありとあらゆる医学雑誌を調べた結果、世界でも羽付きの人間は前例がないとわかつた時、母親と信宏叔父は子供の羽を世間から隠し通すと決めた。水泳の授業は、信宏叔父に耳の病気だと診断書を書いてもらい休んだ。不幸中の幸いだつたのは、羽がさほど大きく成長しなかつたということだ。折り畳めば背中からはみ出すことなくびたりと添わせることができる。そのままおとなしくしていればいいけど、羽は横山の意思とは関係なく動き出すことがあつて、人前に入る時は必ず上半身にサラシを巻きつけておかなくてはいけなかつた。